

## 家のリフォームと在宅ケア

看護学科 原 頼子

最近我が家はリフォーム中である。とはいえ、大々的なものではなく、必要なところからぼちぼちやっ払いこうという年次計画で進めている。そのためにいままで仕事を理由にして、いや、もともと片付けが苦手なこともあり、なかなか捨てきれなかった思い出の品物や、巣立った子供の洋服の整理などに取り組んでいる。

しかし、必要に迫られて整理していたのに、自分や家族の歴史に浸り、長い年月過ごしてきたこれまでの生活、普通に暮らせることの大切さを改めて実感し、認知症になってもがんになってもこの家で最期まで過ごしたいと考えるきっかけとなった。家で暮らすとなると、少なからず家族の理解と協力は必要で、「自分勝手に決めても引き受けられない」と宣言されることも覚悟しなければならぬだろうが、私のかすかな救いは看護を学んでいることで、家族の介護負担を少しは軽くできるんじゃないかという自負である。

そんなことを考えていたら、療養中の隣の奥さんが杖をついて庭に出てきているのに出逢い、百日紅の下での世間話はとても和むものとなった。緑に囲まれた自宅の周辺では、まだ隣同士の付き合いや、お宮を守り、祭祀を行う地域の行事などが残っており、若いころにはなるべく姑にお任せだった役割が、ゆっくり移ってきて、そんな日常が自然になってきている。

がん対策基本法によって厚労省は在宅ケアを推進しているが、まだまだ実際の死を自宅で迎える人は2割にも満たないという現状の中、福岡県は在宅緩和ケアに関わる医療者の意識が高く、支援ネットワークの整備や在宅医療が進んでいる地域である。こんな私の甘い希望を叶えるにはとてもありがたい環境は整いつつある。

授業では学生さんに「不安なく必要な時に必要なケアが受けられるよう、チームメンバーの専門性・力量を見極め、問題解決できる職種へ働きかける観察力、創造力、ネットワーク力が大切です。そういうケアを提供することが私たちの職務です。」なんて言っている、こんな頼りない自分だけれど、これからは希望を持って、その実現のために、少しずつ戦略を考えていこう。家のリフォームと共に、気持ちのリフォームも進めていくことにしよう。